

青年の性的問題行動と保護者のモニタリング

高岸 幸弘・池上 駿*・西村 岳人**

Adolescents' sexually abusive behavior and parental monitoring

Yukihiro Takagishi, Shun Ikegami, Gakuto Nishimura

(Received October 1, 2021)

Sexual problem behavior in adolescents has become an increasing concern in recent years. An aspect that has received attention in intervention support is parental monitoring. Research on parental monitoring has been developed in the area of delinquency correction, and researchers initially tried to capture parental monitoring through parents' knowledge of their children. Recently, parental monitoring has been viewed as consisting of three components: parental knowledge, parental solicitation, and parental control. It is also important for effective intervention to understand parental monitoring as a bidirectional activity between parents and children, rather than a one-directional activity on the part of parents. However, studies focused on sexual problem behavior among adolescents remain sparse, and the desirable form of monitoring is still unclear. This study reviews previous research on parental monitoring and discusses how parental monitoring can be used to prevent adolescents' sexual problem behaviors from a theoretical perspective. Parental monitoring would be effective for not only delinquent behavior but also sexual problem behavior.

Key words : sexually abusive behavior, parental monitoring, adolescents' delinquency

I. はじめに

青年期の性的問題行動は近年ますます関心が高まっている。令和2年度警察白書によると、青少年全体の非行件数はこの10年間で漸減しているものの、わいせつ行為など性的問題行動は微増している。この傾向は日本だけではなく、欧米諸国やアジア諸国でも問題が深刻化していることが報告されている (Ybarra, & Petras, 2021)。そのこともあり、彼らの性的問題行動の発現につながる要因の研究 (Van Ness, 1984; Seto, 2010) や、それらに基づいた再発防止のための治療教育的介入のあり方に関する介入法の開発などは着実に蓄積されてきている (Ward & Gannon, 2006; Kahn, 2007, 2001; Hunter, 2011; Malovic et al., 2018)。

問題行動の主体が未成年であることを踏まえると、再発防止には保護者による青年らの行動のモニタリング (parental monitoring) が重要になると考えられる。

事実、青年の性的問題行動再発防止のための治療介入プログラムには、保護者のモニタリングの重要性を強調しているものが多い (Kahn, 2001; Malovic et al., 2018)。しかしながら、保護者のモニタリングをいかに行うと青年の性的問題行動の発生を抑止できるのか、あるいはそもそも保護者のモニタリングは性的問題の防止に有効な手段と言えるかどうか検証した研究はほとんどない。

保護者のモニタリングの研究は、1950年頃から少年非行矯正の領域で主に展開してきたが (Dishion & McMahon, 1998)、この領域においても、上述のように性的問題行動に焦点化した保護者のモニタリングの研究はほとんどない。そこで本稿では、青年の問題行動と保護者のモニタリングの関連について、これまでの知見を整理し、その結果に基づいて、青年の性的問題行動の発生予防のための保護者のモニタリングのあり方について考察する。

* 熊本県福祉総合相談所

** 児童心理治療施設こども L.E.C. センター

II. 保護者のモニタリングの研究の発展

保護者のモニタリングはもともと①子どもの安全、②反社会的行動、③物質乱用の3領域で注目されて研究されてきた。そのうち①は就学前の子どもが対象であるため、青年の問題行動とは関連がないように思われるが、これら3つは相互に関連している (Peterson, Ewigman, & Kivlahan, 1993)。それは保護者のモニタリングが、発達年齢に応じた戦略 (strategy) をとることによって有効となるからである。この点については後述する。まず保護者のモニタリングという用語の意味するところから確認する。

1. 保護者のモニタリングの定義

非行や問題行動の研究の初期は、多くの研究者が保護者のモニタリングを指して、保護者の監督 (supervision) という言葉を好んで使用してきた。しかしながら、「監督」が子どもを目の前で監視するなど直接的な接触による行為を指すことが多いのに対し、「モニタリング」は電話を使って子どもの様子を把握するなど、遠距離でも保護者の影響を及ぼすことも含む。つまりモニタリングの方がより多くのことがらをカバーする用語であり、行動の範囲が広がる青年期においては、徐々にモニタリングが使用されるようになった (Coley & Hoffman, 1996)。

そのような多くのことがらを含む用語として、Dishion & McMahon (1998) は保護者のモニタリングを「種々の生態学と子どもの発達状況に応じた一連の社会的認知と行動：a complex set of social cognitions and behaviors that adjust to varying ecologies and the developmental status of the child (p.73)」と定義した。彼らの定義では保護者の外見上の行動だけでなく、社会的認知も含めて検討していくことが重要な点と言える。つまり、保護者がどのような価値観や態度でもって子どもの問題行動を捉えているか明らかにすることが、効果的なモニタリングへとつながると考えられるのである。

2. 発達段階と保護者のモニタリング

Dishion & McMahon (1998) に定義にもあるように、保護者のモニタリングは発達段階を踏まえてなされるべきである。また、モニタリングという構成概念の定義は領域横断的で、しつけ (parenting) に含まれるものと言える。しつけは保護者の子育てや子どもに関する信念や価値観がその実践に影響を与える。しかしながら保護者のモニタリングに関する研究の多くは、信念や価値観といった複雑な社会的認知を含む、保護者のモニタリングに関する動機づけがほとんど排除され

ている (Johnston, 1996)。

保護者の動機づけに始まり、子どもをモニタリングし、そして行動を管理することをその基礎に据えたしつけのモデルを Dishion & Patterson (1996) が提唱している (Figure 1)。彼らのモデルによると、しつけは親子関係を形作る重要な要素の一つであるが、それに影響するものとして、子育てに関する価値観や目標を指す「動機づけ」、限界設定や強化といった活動を指す「行動管理」、そして監視や環境設定などを含む「親のモニタリング」がある。つまり、良好な親子関係が築けていれば保護者は子どもをしっかりとモニタリングをしようとするし、反対に、適切にモニタリングをすることで良好な親子関係も育まれるのである。モニタリング意外の動機づけと行動管理の2つの要素も、相互に関連するものであり、これら3つは Dishion & McMahon (1998) の定義に含まれるものと言えよう。

保護者のモニタリングは親子関係につながるものであるが、親子関係の質は子どもの発達段階に応じて変化する。そして、適切なモニタリングというものは、親子関係の質の変化に応じて変化していくものである。幼少期は身体的・情緒的ニーズを満たすような関わりのための直接的な行動観察が中心となるが、徐々に子どもの自立と自律を促進させるようにモニタリングは方法も場面も変化していく (Rogoff & Wertsch, 1984)。学童期は家庭内だけでなく、学校での行動もモニタリングの対象となり、保護者が直接的に監督できない時間の子どもの情報をいかに把握するかが重要となる。また、彼らの発達課題を踏まえると、基本的な社会のルールを守ることをしっかりと身に付けることを目指して、モニタリングもなされるべきであろう。思春期・青年期はより直接監督されない時間は増え、また、友人関係が彼らの判断や行動に大きな影響を及ぼす。非行行為の発生の最も大きな影響要因の一つは非行仲間との付き合いである (Stoolmiller, 1994)。つまり、近隣を含む環境の把握がより重要となる。その一方で、青年期の発達課題を踏まえると、彼らの自立を阻害しないような適切な保護者の立ち位置というものに一つだけの正解はないと言える (Crocetti, et al., 2016)。

発達段階と保護者のモニタリングの先行研究を踏まえると、保護者のモニタリング研究においては、単に子どもの追跡という文字通りモニタリングだけを測定すればよいというものではないことが分かる。モニタリングに対する保護者の考え方、年齢に応じた介入の基準と方法、子どもの行動だけでなく環境要因といった要因はモニタリングの研究において重要となる。これらを踏まえ、次に、問題行動の発現との関連が大き

い青年期を中心に、保護者のモニタリングとの関係を見ていく。

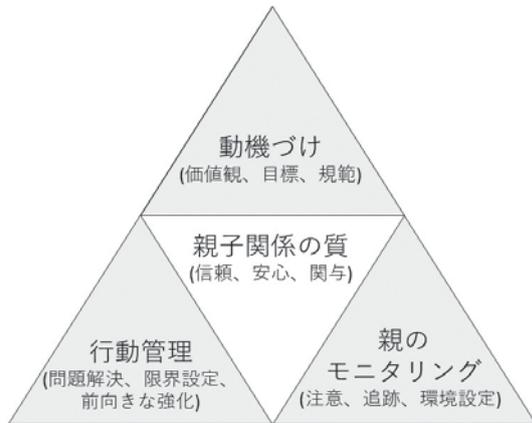


Figure 1 しつけ (parenting) の3つ組
(Dishion & Patterson, 1996 より)

3. 問題行動と保護者のモニタリングの関連

上述のように、青年期は発達課題の上でもそうであるが、保護者のモニタリングを認知し、その意味を理解する能力も向上するため、保護者のモニタリング研究においては、青年側の受け取り方がどうあるかがより重要となってくる。Patterson (1993) が、青年の非行仲間との付き合いと非行発生との関連を指摘して以来、モニタリングは面接者と子どもと親の3者で評価するようになった。

青年期の問題行動と保護者のモニタリングは、保護者側の視点と、青年側の視点の相違についても注目されることが多い。モニタリングに関する保護者の報告は、社会的望ましさのバイアスがかかっている可能性があるため、あまり役に立たないと批判されることもあった (Patterson et al., 1992)。しかし、Shelton ら (1996) は、Alabama Parenting Questionnaire ; APQ の下位尺度である Poor Monitoring/Supervision スケールを用いて、そのようなバイアスは存在しないことを明らかにしている。Dishion & McMahon (1998) も同様に、保護者の報告は後の問題行動の測定に対して優れた予測妥当性を示すことを報告している。教師の報告も保護者のモニタリングと収束の妥当性があることが報告されているが、報告者を広げると多様化して研究結果が混乱するので、あまり多くの報告者を使って研究することは好ましくない。モニタリングの測定上の課題は後述するが、報告者によって生じうると考えられる問題は、報告者を保護者と子どもに焦点化することである程度解決されるため、近年の保護者のモニタリング研究は主に保護者と子どもの2者の報告によってなされるものがほとんどである。

保護者のモニタリングと問題行動の発現は多くの研

究報告がある。文化や民族によらずある程度共通してみられる特徴といえるものも多い。非行や問題行動の領域で最初に注目されたことは、青年期の非行行為は小さいころの非行行為よりも乏しいモニタリングの方が予測するという事実である (Loeber & Dishion, 1983)。その後、具体的な非行行為や反社会的な行動に注目して研究が行われた。6～13歳の放火をした子どもの保護者はモニタリングが少なかったという報告 (Kolko & Kazdin, 1990) や、物質乱用 (Baumrind, Moselle, & Martin, 1985; Brown, Mounts, Lamborn, & Steinberg, 1993)、喫煙 (Radziszewska, Richardson, Dent, & Flay, 1996) なども保護者の乏しいモニタリングと関連があることが明らかとなった。さらに、保護者のモニタリングが乏しいと、子どもは危険な性行為を行いやすくなることも示されている (Metzler, Noell, Biglan, Ary, & Smolkowski, 1994; Romer et al., 1994)。危険な性行為は、必ずしも性的加害行動というわけではないが、中には加害行為へとつながるケースもある。Romere et al. (1994) は、危険な性行為の防止に対しては保護者と子どもの中間の共同のモニタリングが有効であると述べている (Romer et al., 1994, p. 985)。

乏しいモニタリングはアルコール依存の親に典型的であることも分かっている。このことが子どもの違法薬物の使用の説明になりうると考えられている (Chassin, Pillow, Curran, Molina, & Barrera, 1993)。この点を踏まえると、問題のあるモニタリングをする保護者の特徴について明らかにすることが一つの課題となる。非行行為や反社会的行動で逮捕・起訴された青年の保護者は、保護者自身が刑事犯罪で逮捕された者が多く、また、自身が児童虐待、特に心理的虐待を受けた経験を持っている者が多い (Duane, et al., 2003)。また、性的問題行動を抱える青年は、外来メンタルクリニックから抽出された臨床対照群や非行問題を抱える青年と多くの共通点が示されているが (O'Reilly et al., 1998; O'Halloran et al., 2002)、性的問題行動を抱える青年は、彼らの保護者の薬物やアルコールの乱用を目撃した経験が、臨床対照群や性的問題行動以外の非行問題を抱えている青年よりも多いということも報告されている (Duane, et al., 2003)。さらに、感情表現や行動制御に関して、性的問題行動を抱える青年を含む非行青年の家族機能は問題性が高いことが示されている (O'Halloran et al., 2002)。

以上の研究結果を踏まえると、保護者の背景を十分に踏まえた上で、よりモニタリングをさせていくべきという結論が導き出される。そのためには、保護者のモニタリングに対する動機付けが必然的に重要となる。保護者自身が子どもの頃にモニタリングをされた

経験は、彼らのモニタリングに対する動機付けに影響を与える。反社会的な親は、モニタリングをする可能性が低いことが分かっている (Patterson & Dishion, 1988)。反社会的な親は、子どものポジティブな行動への注目は反社会的ではない親と違いはないが、非行行為や反社会的な行動は過小評価する傾向がある (Wahle & Sansbury, 1990)。そのため、90年代後半頃盛んに注目された、保護者のモニタリングの質的向上のための介入は、主に動機づけを高めることを志向したものと、追跡スキルの向上を目指したものとがある。前者の多くは、動機づけ面接の技法を用いて、保護者の変化への動機付けを高めることを目指し、保護者の良好な変化が報告されている (Dishion & Kavanagh, 2003)。後者は追跡スキルの向上のための保護者トレーニングとして、ロールプレイを用いて他の保護者に電話をかけて子どもの状況を把握する練習などを進めているものなどがある (Dishion & Kavanagh, 2003)。どちらも一定程度の改善が報告されているが、劇的な改善には至っておらず、課題は多い。

Ⅲ. 青年の情報開示と保護者のモニタリング

保護者のモニタリングと非行の関連に関する初期の研究で、横断的にも縦断的にも保護者のモニタリングが乏しい青年は非行傾向、反社会的傾向にあることが示されてきたわけであるが、過去の研究で報告されたものは、高いモニタリング得点の保護者が、子どもの規制や追跡をしていない可能性がある。例えば保護者のモニタリングを数値化するために、例えば「あなたはあなたの子が誰と友達か、夜どこに行っているか、どのようなお金の使い方をしたか、どれだけ本当に知っていますか？」などと問う (Fletcher et al., 1995, p. 262; Weintraub & Gold, 1991, p. 272)。中には子どもと親の両方に同じ質問をするものもある (Crouter, Manke, & McHale, 1995; Patterson & Stouthamer-Loeber, 1984)。これは保護者のモニタリングを、保護者の子どもに関する“知識”のみで評価しているといえる。追跡と監視という概念で説明されてきたモニタリングが、保護者の子どもに関する知識と同等のものとして扱っても問題ないと言えるだろうか。また、これらは“どうやって”そのことを知ったのかは問われておらず不明のままである。保護者が子どものことを知るための道筋は3つ考えられる。一つ目が、子どもが自主的に保護者に話すというもの (情報開示; disclosure)。二つ目が、保護者が子どもに尋ねて情報を得るというもの (要請; solicitation)。最後に保護者が子どもに対してルールを決めたり、やっていいことや一緒に遊んでいい相手など、制限を課すことに

よって、子どもが話すまでもなく子どもの状況を把握するというもの (規制; control) である。青年の物質使用を減らすためのある介入研究では、保護者は子どもが薬物やアルコールを使用する仲間と付き合いことや、アルコールへのアクセスをコントロールするために、より積極的な努力をするように訓練したものがある (Cohen & Rice, 1995)。この研究では、結果的に子どもの物質使用は減少したことが報告されているが、減少に強く寄与したものは予測していた保護者の規制ではなく、良好な親子関係や相互に尊重する親子関係であった。この結果からも、モニタリングを単に保護者の知識として捉えたり、あるいは規制をモニタリングとして捉えたりすることの危険性が示唆されている。

Stattin & Kerr (2000) は、親子のアタッチメントが良好であることが非行の予防因子として機能していると提唱した Cernkovich & Giordano (1987) らの主張を踏まえ、親子のコミュニケーションが保護者のモニタリングの効果に関連すると考えた。そして彼らは703人の14歳の青年とその保護者を対象に、保護者のモニタリングと子どもの非行行為との関連を、保護者の知識、子どもの情報開示、保護者の要請、保護者の規制に分けて検証した。保護者にも青年にも同じ質問内容で問い、データを検証した。その結果、性別や情報提供者 (保護者・青年) を問わず、保護者の子どもに関する知識の高さは、良好な適応を示す複数の指標と関連していることが分かった。つまり、保護者の知識はこれまでの研究で示されてきた保護者のモニタリングと同様の働きを持ちうる可能性が示唆された。しかしながら、青年が報告した、保護者の知識、子どもの情報開示、保護者の要請、保護者の規制は全て非行行為の減少と関連していた一方、保護者の報告によるものは子どもの情報開示のみが非行行為の減少と関連していた。保護者と青年どちらにも共通して非行行為の減少と関連していたのは、子どもの情報開示である。また、保護者の規制の努力は、子どものコントロールされているという感情を部分的に除外すると、良好な適応と関連していた。Kerr & Stattin (2000) は追試を行い同様の結果を報告している。彼らの一連の研究によって、保護者のモニタリングは、これまで保護者の追跡スキルや直接的監督という解釈が主流であったこととは対照的に、「モニタリング」はその言葉が意味するような、保護者の活動ではないことが明確になったことに加え、保護者の追跡・監視の努力は従来考えられていたほど有効ではないことが明らかになった。それは、子どもの活動とも言える。子どもが自発的に行う情報開示なのである。子どもの情報開示につながる保護者や親子の活動こそが、「モニタリング」

だという視点の変換である。自分の行動をある程度オープンにしている子どもは問題行動が少ないということは経験的に了解ができることであるし、これは翻って、子どもに関する知識が高い保護者はしっかり追跡しているから子どもが問題行動を起こさないのではなく、きちんと話してくれる子どもだからこそ子どものことをよく知っている場合も多いのだろう。

その後保護者のモニタリング研究は、相互システムとして概念化されていった。子どもの行動が保護者のモニタリング行動を変えることもあるし、保護者のモニタリングが子どもの行動を変えることもある。例えば子どもがより自主的に情報開示をすれば、保護者が課す制限は軽くなるかもしれないし、逆に保護者がルールを必要以上に厳しくすれば子どもの情報開示は反動で少なくなるかもしれない。つまり、保護者が一方向に子どもをモニタリングするというのではなく、相互に影響し合うのが保護者のモニタリングの特徴だということである。(Kerr, Stattin, & Burk, 2010)。この考え方に基づくモデルを用いた研究によって、青年の情報開示は時間の経過とともに問題行動の低下を予測し、逆に青年の問題行動は親への情報開示の少なさを予測することが共通して報告されるようになった(Kiesner et al., 2009; Keijsers et al., 2010)。

保護者のモニタリングを知識、要請、規制の3要素に分けて検証していくことが共通認識となり、子どもの情報開示が非行行為の減少に大きな影響を与えることは一貫していることが明らかになった。しかし、一般化や具体的な助言の明確化には確認しておかねばならない点がある。保護者のモニタリングに関しては、マルチレベルモデル(Multi-Level analysis)や交差遅延モデル(Cross-Lagged Models)など、最新のモデルを使用した縦断的研究による結果もいくつか報告されている(Kuhn, Phan, & Laird, 2014; Racz & McMahon, 2011)。これらのモデルの大部分は因果関係を示す代理的変数として、個人の順位付け位置の共変動、すなわち、ある時点および経時的な研究における他の参加者に対する個人の相対的な位置を捉えている。しかし、相関は個人間の差しか捉えておらず、適用されている縦断的モデルのほとんどは、個人間の変化と個人内の時間的変動を分離していない(Keijsers et al. 2010; Kiesner et al. 2009)。子どもと親の間の相互作用は、家族の中で行われる。親子のコミュニケーションと青年の問題行動の因果関係も家族内のものと言える。例えば、家族Aの親子の相互作用は家族Aの子どもの問題行動に影響を与え、家族Bの親子の相互作用は家族Bの子どもの問題行動に影響を与え、家族Aの因果関係は家族Bの因果関係に影響しない。家族間のレベルで発見されたことは、乏しいモニタリ

ングを青年の問題行動に結びつける家族内の因果過程を代替するものとなるはずであるが、現実には当てはまらない可能性がある。食い違いの原因となる代表例が、生態学的な誤謬を示すシンプソンの逆説(Kievit, Frankenhuis, Waldorp, & Borsboom, 2013)である(Figure 2)。シンプソンの逆説は、集団レベルでの因果推論がサブグループには当てはまらないという現象を指すものである。この逆説は、集団からサブグループ、サブグループから個人、さらには集団から個人内の経時変化など、異なるレベルの観察を経て導き出されるあらゆる推論で生じる可能性がある。Figure 2では、保護者のモニタリングと非行行為との間には、全体(個人間レベル)では負の相関がみられる。この関連からはモニタリングを行うことの非行減少に対する効果が認められると言え、保護者にはモニタリングをより積極的に行うよう助言ができる。しかし、それぞれの家族内での関連をみると、保護者のモニタリングと非行行為には正の相関がみられる。家族内での関連からは、保護者がモニタリングを行うことのネガティブな結果が予想されるため、保護者のモニタリングは控え、青年の自主性と自立を尊重するよう助言されることになる。つまり相反する解釈が生まれるのである。

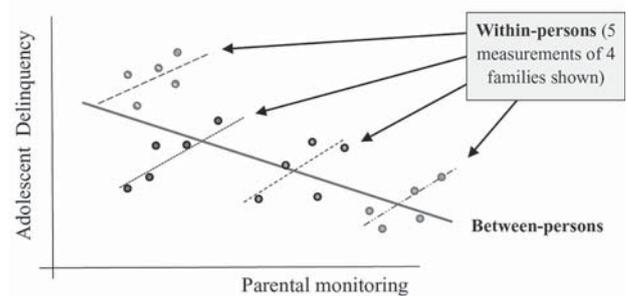


Figure 2 シンプソンの逆説の例
(Keijsers., 2016, p 3 より)

青年期の特徴を踏まえると、家族は動的なシステムとして捉える必要がある。つまり青年の自立を促すためには保護者の規制は徐々に弱めていかねばならない。さらに、保護者の行動が同じであったとしても子どもの適応にどの程度の効果をもたらすかという点でも、家族は互いに異なる。これらを踏まえると、全体の相関関係は個人内のプロセスとは矛盾が生じるのである。これらの問題を考慮して、Keijsers (2016)は無作為切片化交差遅延モデル(Random-Intercept Cross-Lagged Models)を用いて、個人間の関連と個人内の関連を区別することで、親のモニタリングと青年の非行行為との関連を検証した。その結果、青年の情報開示と非行行為の間に潜在的な因果関係があることが示されたが、同時に、保護者のモニタリングと非

行行為との関連は、家族内で作用する因果関係のプロセスではなく、安定した個人間の差異によって説明できることも示された。保護者のモニタリングと非行行為との関連は、個別性が高く般化できない類のものではないことが明確になったと言える。

IV. 保護者のモニタリングに影響する青年側の要因と環境の要因

保護者のモニタリングの効果が個人間・家族間で認められるものであっても、個々の研究結果はばらつきがあり、種々の社会的状況の影響を受ける。理論的には、モニタリングが最も効果的なのは、状況的な要求に応じて必要とされる場合であると考えられる。リスクの高い状況にあれば、青年の自主性や自立、プライバシーといったことよりも強力な規制が有効であるかもしれないし、モニタリングの正当性を受け入れる傾向が強いと考えられうる (McElhane & Allen, 2001)。

1. 経済的地位と保護者のモニタリング

経済的地位の低さは、非行に関する文献の中心的なリスク要因の一つである (Bjerk, 2007)。保護者のモニタリングと経済的地位の関連については Rekker ら (2017) が 824 人のオランダ人青年を対象に 6 回の前方視的調査を行い検証している。保護者のモニタリングは非行の発生と関連があったが、経済的地位によってその効果は調整されていた。経済的地位が高い青年の場合、保護者の規制が高くなっても非行は増えなかったが、経済的地位が低い青年の場合は、保護者の規制が高い場合に非行は増加していた。これは経済的地位が保護者のモニタリングの効果そのものに直接影響しているわけではないことは明らかであるが、Rekker らは、経済的地位の低い親はモニタリングを効果的に利用できず、子どもが道を踏み外したときに過剰にコントロールしてしまう可能性があるとして述べている。一方で経済的地位の高い親は、暖かく、オープンで、権威的な育児スタイルをとることが多いため、このような環境では、保護者の規制が青年に正当なものとして認識される可能性が高いと考えられるという。

2. 共感性と保護者のモニタリング

Rekker ら (2017) は、青年の保護者のモニタリングに対する認知について言及したが、保護者がモニタリングのために用いる要請や規制といった戦略は、どのような青年に対して有効であるかはあまり明確になっていない。実際、青年の反社会的行動に対する親の要請と規制の効果に関する研究では、矛盾した結果が示されている (Racz & McMahon, 2011; Keijsers, 2015)。保護者の行動を正当なものとして認識する青年が

いる一方で、これらの行動を押し付けがましく不適切なものと思える青年がいる理由を、子どもの共感性によって説明可能とする報告もある (Keijsers & Laird, 2014)。それらを踏まえ Crocetti ら (2016) は、保護者のモニタリングの意図をくみ取る要素として青年の共感性に注目し、共感性の程度によって、保護者のモニタリングの結果に違いが生じるか検証した。彼らは 379 名の青年を対象に縦断デザインによる検証を行った。その結果、共感性は保護者の要請が青年の反社会的行動に及ぼす影響を調整していたことが明らかとなった。彼らは共感を情動的共感と認知的共感とに分けて分析していたが、共感の種類による違いはなかった。Crocetti らの報告によると、共感性の高い青年では保護者の要請が反社会的行動に悪影響を与え、共感性の低い青年では逆の影響を与える。共感能力の高い青年は、保護者の要請が多いと嫌悪的に反応する可能性が高いことが示されたわけであるが、青年の共感能力が高い場合には、保護者は青年の自律性欲求の発達に合わせてモニタリングを行うことが重要であり、モニタリングの押し付けがましさに注意を払う必要があるといえる。一方、保護者の規制の反社会的行動への影響に対しては、情動的共感も認知的共感も調整作用はみられなかった。

3. 地域の危険性と保護者のモニタリング

青年の保護者は、子どもの行動に関する知識を深め、彼らが問題行動を起こさないようにするために、積極的に関与型のモニタリング戦略をとることがある。しかしながら主要な保護者のモニタリング研究の報告では、こうした積極的なモニタリング戦略の中には、青年の問題行動を防ぐというよりも、むしろその増加を予測するものもある (Kerr, Stattin, & Burke, 2010; Stattin & Kerr, 2000)。しかしながら Bendezú ら (2018) は、犯罪が多発するなど危険な地域や、危険な状況にある場合は、一貫して積極的な保護者のモニタリングは問題行動の低減に寄与することを明らかにしている。Bendezú らはリスクの高い地域に住む (都市・人種) 多様な青年 753 名を対象に、保護者のモニタリングとその後の問題行動の関連を調べた。その結果、保護者の知識の増大がもっとも青年の問題行動の減少を予測していた。これは危険性の低い地域の青年を対象とした研究ではみられなかった結果である。また、知識増大は保護者による日常的なコミュニケーションの努力によって生じていることが分かった。危険性の高い地域の青年の場合は、保護者が青年の行動をより正確に把握することが重要であると言えるが、それはあくまで結果であり、知識の多い保護者の日常的な対話の努力が将来の問題行動を調整している可能性もある。さらに、危険な地域での研究結果ではあるものの、

再犯リスクの高い場合などにも適用できる可能性も残していると言える。

V. 性的問題行動と保護者のモニタリング

これまで主に青年の問題行動全般と保護者のモニタリングとの関連について概観してきたが、それらの知見を踏まえ、本節では性的問題行動に対する保護者のモニタリングのあり方について考察する。

性的問題行動を抱える青年と保護者のモニタリングに関する研究はほとんどないが、近年の保護者のモニタリング研究の知見を踏まえ、それを青年の性的問題行動に適用した研究を Stewart ら (2019) が実施している。Stewart らは性的加害を行った青年 338 名と、性的加害以外の問題を抱える非行少年 346 名、さらに、統制群として、非行行為を行ったが矯正施設処遇にまでは至っていない青年 256 名と彼らの保護者を対象に、保護者のモニタリングを比較検討した (青年の平均年齢は 16 歳)。彼らはこれまでの保護者のモニタリング研究のスタンダードとなっている、知識、要請、規制を保護者と青年の両者に報告させた。さらに青年が主観的に感じる保護者のモニタリングの質を尋ねた。その結果、統制群が最も保護者のモニタリングの質を高く評価しており、性的加害であろうとその他の非行であろうと非行少年の保護者はモニタリングの質が低いと評価されていた。保護者の知識も同様の結果 (統制群 > 性的加害, 非行) となったが、「家庭内で青年が何をしているか知っているか?」という質問のみ、性的加害青年の保護者が一番低い結果であった。性的問題行動を抱える青年の保護者は子どもに関する情報をより努めて把握する必要があると見える。特に家庭内での活動が不明であるということは、親子のコミュニケーションが良好ではない可能性を示唆しており、情報収集だけでなく、コミュニケーションのあり方のアセスメントと介入の有効性があると言えよう。要請については性的加害の青年は統制群よりも低いことが示されたが、非行少年とは差がなかった。また、規制については統制群と同等で非行少年よりも高いことが示された。性的問題行動を抱える青年の保護者のモニタリングと非行少年の保護者のモニタリングとの共通点を差異が示されたわけであるが、保護者が積極的に子どもに対して、彼らの行動を尋ねるような働きかけを一貫して使用していない場合、青年の性犯罪を防ぐのに十分ではない可能性が示唆された点は重要であろう。特に、青少年に何をしているのか、誰と一緒にいるのか、いつ帰るのかを尋ねることが少なかった。これは、これらのモニタリングにおける重要なギャップを浮き彫りにしている。親子のコミュニケーションや親子関係

についても言えることであるが、一貫性は性的問題行動の保護者のモニタリングにおいて重要なキーワードとなるのではないだろうか。

性的問題行動に関する保護者のモニタリングの一貫性については、Basile ら (2018) が性的暴力を行った青年を対象に調査を行い、性的暴力加害青年は非加害青年に比べ、中学から高校にかけての親のモニタリングの減速が早いことを明らかにしている。発達段階に応じて保護者のモニタリングは変化させていく必要があるとはいえ、急速なモニタリングの弛緩は注意深くあるべきといえる。

Basile ら (2018) の研究で明らかになったことの一つは、彼らは 3549 名の高校生を対象に調査を実施したが、性的暴力を行ったことがあると回答したのはそのうち 20% もいたことである。日本ではそれほど多く報告されているわけではないが、諸外国では学校内で性的暴力を行う青年の数が深刻化していることが報告されている (Lloid, 2019)。保護者の直接的な監督ができない時間と場所であるため、この点は保護者のモニタリング研究領域だけでなく領域横断的に検討していく必要があると言える。

性的問題行動の保護者のモニタリングに期待されることの一つは再発防止に加え、そもそもの発生予防であろう。性的問題行動の 3 分の 1 以上は、他の子どもが発端となっていると言われている (Finkelhor et al., 2009)。一部のケースでは学童期に最初の性的問題行動に関わり、それが青年期にもつながっている。性的問題行動の発端となる子どもは、ほとんどが年少で複数の逆境体験 (Adverse Childhood Experiences: ACEs) を重ねており、逆境体験が多いほどより侵襲的な性的問題行動を行う (DeLego et al., 2020)。逆境体験のある 10 代の青年とデート DV に関する研究では、逆境体験とデート DV 加害の (そして DV 被害も) 正の相関があることが示されている。しかしながら、保護者のモニタリングが逆境体験とデート DV との関連性を緩衝するという報告もあり、子どもの逆境体験を緩和する保護因子としての保護者のモニタリングの研究も、まさに現在取り組みが進んでいるところである (Davis et al., 2019)。また、性的問題行動を行う子どもの半数以上が性的表現のあるメディアに曝されており、そしてその被曝経験が侵襲的な性行為と関連していたことなどが明らかになっている。つまり性的に露骨なメディアへの露出を管理することが、後の深刻な性的問題行動の防止へとつながりうるわけであり、保護者のモニタリングはその点において重要である。

以上、性的問題行動に対する保護者のモニタリングのあり方について検討した。性的問題行動に対する効果的な保護者のモニタリングは、性的問題行動以外の

問題行動の予防と重なる部分が大きいが、相違点もいくつかあった。保護者のモニタリング活動がより効果的になるために、性的問題行動を抱える青年のアセスメントを行い、一貫したモニタリングを実施することと、加えて、アタッチメントに注目した親子のコミュニケーションも必要な介入の対象となりうることもあると言える。

引用文献

- Baumrind, D., Moselle, K., & Martin, J. A. (1985). Adolescent drug abuse research: A critical examination from a developmental perspective. *Advances in Alcohol Substance Abuse*, 4, 41-67.
- Basile, K. C., Rostad, W. L., Leemis, R. W., Espelage, D. L., & Davis, J. P. (2018). Protective factors for sexual violence: Understanding how trajectories relate to perpetration in high school. *Prevention science*, 19 (8), 1123-1132.
- Bjerk, D. (2007). Measuring the relationship between youth criminal participation and household economic resources. *Journal of Quantitative Criminology*, 23, 23-39.
- Brown, B. B., Mounts, N., Lamborn, S. D., & Steinberg, L. (1993). Parenting practices and peer group affiliation in adolescence. *Child Development*, 64, 467-482.
- Chassin, L., Pillow, D. R., Curran, P. J., Molina, B. S. G., & Barrera, M., Jr. (1993). Relation of parental alcoholism to early adolescent substance use: A test of three mediating mechanisms. *Journal of Abnormal Psychology*, 102, 3-19.
- Cohen, D. A., & Rice, J. C. (1995). A parent-targeted intervention for adolescent substance use prevention: Lessons learned. *Evaluation Review*, 19, 159-180.
- Coley, R. L., & Hoffman, L. W. (1996). Relations of parental supervision and monitoring to children's functioning in various contexts: Moderating effects of families and neighborhoods. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 17, 51-68.
- Crocetti, E., Van der Graaff, J., Moscatelli, S., Keijsers, L., Koot, H. M., Rubini, M., Meeus, W., & Branje, S. (2016). A longitudinal study on the effects of parental monitoring on adolescent antisocial behaviors: The moderating role of adolescent empathy. *Frontiers in psychology*, 7, 1726.
- Crouter, A. C., Manke, B. A., & McHale, S. M. (1995). The family context of gender intensification in early adolescence. *Child Development*, 66, 317-329.
- Davis, J. P., Ports, K. A., Basile, K. C., Espelage, D. L., & David-Ferdon, C. F. (2019). Understanding the buffering effects of protective factors on the relationship between adverse childhood experiences and teen dating violence perpetration. *Journal of youth and adolescence*, 48, 2343-2359.
- DeLago, C., Schroeder, C. M., Cooper, B., Deblinger, E., Dudek, E., Yu, R., & Finkel, M. A. (2020). Children who engaged in interpersonal problematic sexual behaviors. *Child abuse & neglect*, 105, 104260.
- Dishion, T. J., & McMahon, R. J. (1998). Parental monitoring and the prevention of child and adolescent problem behavior: A conceptual and empirical formulation. *Clinical child and family psychology review*, 1 (1), 61-75.
- Dishion, T. J., & Patterson, S. G. (1996). Preventive parenting with love, encouragement, and limits: the preschool years. Castalia Publishing Company, PO Box 1587, Eugene, OR 97440.
- Duane, Y., Carr, A., Cherry, J., McGrath, K., & O'Shea, D. (2003). Profiles of the parents of adolescent CSA perpetrators attending a voluntary outpatient treatment programme in Ireland. *Child Abuse Review: Journal of the British Association for the Study and Prevention of Child Abuse and Neglect*, 12 (1), 5-24.
- Finkelhor, D., Ormrod, R., & Chaffin, M. (2009). Juveniles who commit sex offenses against minors. *Juvenile justice bulletin*, OJJDP. U.S. Department of Justice. December, 1-11.
- Fletcher, A. C., Darling, N., & Steinberg, L. (1995). Parental monitoring and peer influences on adolescent substance use. In J. McCord (Ed.) *Coercion and punishment in long-term perspectives* (pp. 259-271). New York: Cambridge University Press.
- Hunter, J. A. (2011). *Help for Adolescent Males with Sexual Behavior Problems: A Cognitive-Behavioral Treatment Program, Therapist Guide*. Oxford University Press.: U.S.A. (高岸幸弘 (訳) (2012) 性的問題行動を抱える青年の認知行動療法: 治療者向けマニュアル 日本評論社)
- Johnston, C. (1996). Addressing parent cognitions in interventions with families of disruptive children. In K. S. Dobson & K. D. Craig (Eds.), *Advances in cognitive-behavioral therapy* (pp. 193-209). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Kahn, T. (2001). *Pathways: A Guided Workbook for Youth Beginning Treatment*. (藤岡淳子 (監訳) (2009) 回復への道のり パスウェイズ: 性問題行動のある思春期少年少女のために 誠信書房)
- Keijsers, L. (2016). Parental monitoring and adolescent problem behaviors: How much do we really know?. *International Journal of Behavioral Development*, 40 (3), 271-281.
- Keijsers, L., Branje, S. J. T., Van der Valk, I. E., & Meeus, W. (2010). Reciprocal effects between parental solicitation, parental control, adolescent disclosure, and adolescent delinquency. *Journal of Research on Adolescence*, 20, 88-113.
- Kerr, M., & Stattin, H. (2000). What parents know, how they know it, and several forms of adolescent adjustment:

- Further support for a reinterpretation of monitoring. *Developmental Psychology*, 36, 366-380.
- Kerr, M., Stattin, H., & Burk, W. J. (2010). A reinterpretation of parental monitoring in longitudinal perspective. *Journal of Research on Adolescence*, 20, 39-64.
- Kiesner, J., Dishion, T. J., Poulin, F., & Pastore, M. (2009). Temporal dynamics linking aspects of parent monitoring with early adolescent antisocial behavior. *Social Development*, 18, 765-784.
- Kievit, R. A., Frankenhuis, W. E., Waldorp, L. J., & Borsboom, D. (2013). Simpson's paradox in psychological science: A practical guide. *Frontiers in Psychology*, 4, 513.
- Kolko, D. J., & Kazdin, A. E. (1990). Matchplay and firesetting in children: Relationship to parent, marital, and family dysfunction. *Journal of Clinical Child Psychology*, 19, 229-238.
- Kuhn, E. S., Phan, J. M., & Laird, R. D. (2014). Compliance with Parents' Rules: Between-Person and Within-Person Predictions. *Journal of youth and adolescence*, 43, 245-256.
- Loeber, R., & Dishion, T. (1983). Early predictors of male delinquency: A review. *Psychological Bulletin*, 94, 68-99.
- Lloyd, J. (2019). Response and interventions into harmful sexual behaviour in schools. *Child abuse & neglect*, 94, 104037.
- Malovic, A., Rossiter, R., & Murphy, G.H. (2018). Keep Safe: the development of a manualised group CBT intervention for adolescents with ID who display harmful sexual behaviours. *Journal of Intellectual Disabilities and Offending Behaviour*, 9, 49-58.
- McElhaney, K. B., & Allen, J. P. (2001). Autonomy and adolescent social functioning: The moderating effect of risk. *Child Development*, 72 (1), 220-235.
- Metzler, C. W., Noell, J., Biglan, A., Ary, D., & Smolkowski, K. (1994). The social context for risky sexual behavior among adolescents. *Journal of Behavioral Medicine*, 17, 419-438.
- O'Halloran M, Carr A, O'Reilly G, Sheerin D, Cherry J, Turner R, Beckett R, Brown S. 2002. Psychological profiles of sexually abusive adolescents in Ireland. *Child Abuse and Neglect* 26: 349-370.
- O'Reilly G, Sheridan A, Carr A, Cherry J, Donohoe E, McGrath K, Phelan S, Tallon M, O'Reilly K. 1998. A descriptive study of adolescent sexual offenders in an Irish community-based treatment programme. *The Irish Journal of Psychology* 19: 152-167.
- Patterson, G. R. (1993). Orderly change in a stable world: The antisocial trait as a chimera. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 61, 911-919.
- Peterson, L., Ewigman, B., & Kivlahan, C. (1993). Judgments regarding appropriate child supervision to prevent injury: The role of environmental risk and child age. *Child Development*, 64, 924-950.
- Patterson, G. R., & Stouthamer-Loeber, M. (1984). The correlation of family management practices and delinquency. *Child Development*, 55, 1299-1307.
- Racz, S. J., & McMahon, R. J. (2011). The relationship between parental knowledge and monitoring and child and adolescent conduct problems: A 10-year update. *Clinical Child and Family Psychology Review*, 14, 377-398.
- Radziszewska, B., Richardson, J. L., Dent, C. W., & Flay, B. R. (1996). Parenting style and adolescent depressive symptoms, smoking, and academic achievement: Ethnic, gender, and SES differences. *Journal of Behavioral Medicine*, 19, 289-305.
- Rekker, R., Keijsers, L., Branje, S., Koot, H., & Meeus, W. (2017). The interplay of parental monitoring and socioeconomic status in predicting minor delinquency between and within adolescents. *Journal of Adolescence*, 59, 155-165.
- Rogoff, B., & Wertsch, J. V. (1984). New directions for child development. San Francisco: Jossey-Bass.
- Seto, M. C., & Lalumiere, M. L. (2010). What is so special about male adolescent sexual offending? A review and test of explanations through meta-analysis. *Psychological bulletin*, 136, 526-575.
- Silovsky, J. F., & Bonner, B. L. (2003). Sexual behavior problems. In T. H. Ollendick & C. S. Schroeder (Eds.), *Encyclopedia of clinical child and pediatric psychology* (pp. 589-591). New York: Kluwer Academic/Plenum.
- Stattin, H., & Kerr, M. (2000). Parental monitoring: A reinterpretation. *Child development*, 71 (4), 1072-1085.
- Stewart, K. E., Sitney, M. H., Kaufman, K. L., DeStefano, J., & Bui, T. (2019). Preventing juvenile sexual offending through parental monitoring: a comparison study of youth's experiences of supervision. *Journal of Sexual Aggression*, 25, 16-30.
- Stoolmiller, M. (1994). Antisocial behavior, delinquent peer association and unsupervised wandering for boys: Growth and change from childhood to early adolescence. *Multivariate Behavioral Research*, 29, 263-288.
- Ward, T., & Gannon, T. A. (2006). Rehabilitation, etiology, and self-regulation: The comprehensive good lives model of treatment for sexual offenders. *Aggression and violent behavior*, 11, 77-94.
- Weintraub, K. J., & Gold, M. (1991). Monitoring and delinquency. *Criminal Behavior and Mental Health*, 1, 268-281.
- Van Ness, S. (1984). Rape as instrumental violence: a study of youth offenders. *Journal of Offender Counselling Services and Rehabilitation*, 9, 161-170.
- Ybarra, M. L., & Petras, H. (2021). Groups of sexual violence perpetration in a national sample of youth 13-25 years of age. *Prevention science*, 22 (2), 205-215.